

【原 著】

大都市に独居する超高齢女性の支えについて

—一時例を通して—

谷 井 康 子*

【要 旨】

都市部に独居する高齢女性の支えについて、一事例を通して検討をした。病弱でありながらも積極的に独居生活を選択し、維持している超高齢者の支えとなっているものは何かを明らかにした。研究方法は家庭訪問し、インタビューガイドを用いて面接を行った。面接で得られたデータに加えて対象者の自費出版した「自分史」を参考にした。分析方法はエリクソンの成長発達理論を参考にまとめ独居生活の支えとなっているものを分析した。結果として、3つの主要因について明らかにし、それらについて考察した。1. 誇り：幼児期に祖母より受けた誇り高い生き方が影響していた。人生を振り返り、様々な体験を統合し、肯定的に捉える事ができ自分の生き方に自信と誇りを持っていた。2. 信頼関係：近隣者との関係は希薄であったが、深い相互理解と強い絆で結ばれた家族や仕事・趣味仲間との関係はお互いの考えを尊重しあい、精神的にも实际的にも生きる上での支えとなっていた。3. 信仰：キリスト教や仏教、神道などあらゆる宗教が尊重される環境で青年期まで過した事が強く深い宗教心を育ませたと考えられる。宗派を超えた天の神さまとの愛の関係は世代を超えた継続性や人生に意味を与え、孤独や不安を乗り越える力となっていた。

【キーワード】 超高齢女性、独居生活、支え

はじめに

日本の平均寿命の延長速度は欧米に比べ著しい。これには急速な経済発展や保健医療活動の充実など多くの要因が関連している。一方、高齢者に対するイメージは余り好ましいものばかりとは言えない。特に85歳以上の超高齢者については欧米諸国においても歴史的にも身体的側面のみならず、精神的・社会的に機能障害や機能喪失が目立ち病弱になることが強調されやすい。そのため医療機関などの公的支援の利用が高く経済的圧迫となりやすいと考えられている。しかし、超高齢者でも高い機能レベルを維持しているものも増えつつある事も事実である(Camacho, Strawbridge, Cohen, and Kaplan, 1993)。多くの後期高齢者(75~84歳)及び超高齢者はできるだけ長く身体的・精神的・社会的機能レベルを維持し、住み慣れた地域や家庭で最期まで自立した生活ができる事を望んでいる(Porter, 1994)。そのため、寿命の延長に伴って独居高齢者の割合も増加している。1998年の全国家庭動向調査によれば、65~69歳まで

の6.9%、70~75歳までの9.1%、75歳以上の9.8%が独居者である。特に男性よりも6.85歳平均寿命の長い女性の独居高齢者の増加が目立ってきている。1998年の国民生活基礎調査では65歳以上の独居者は272.4万人であるが、女性の独居者は80%を占め、216.9万人となっている。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、これが2010年には306万人に成ることが予想されている。(厚生省, 2000, p.27)。独居している高齢者がより高いレベルの機能を維持し、自立した生活を継続するにはどのような要因が関連しているのだろうか。特に超高齢者の独居生活は地域の繋がりが希薄となりやすい大都市では近隣者の支援が得られにくいため様々な困難が予測される。しかし、大都市における超高齢者の独居生活者の支えについての研究は殆ど見られない。早期より高齢化率の高い過疎地では高齢者対策が徐々に考え実施されてきたが、大都市ではその対策はまだ十分とは言えない。今後、地域の文化や特性を踏まえ、医療・保健・福祉の領域では様々な施策を考えて行くことが望まれる。

* 日本赤十字広島看護大学 tani@jrchn.ac.jp

Erikson (1959/1982) はパーソナリティは生涯を通して発達し続けるという見解にたっている。高齢者は、身体的・心理社会的機能低下や喪失は避けられないが、長い人生体験を通して身に付けた知恵を失う事はないと考えている。この Erikson の成長発達理論は人間の一生をライフサイクルととらえ、それは出生から死に至るまで、成長発達の可能性を持った8つの段階の連続であると仮定している。各段階には達成すべき課題があり、1つの段階から次の段階に進む時に心理的危機を乗り越えて進んで行く。老年期の発達課題は自我の統合対絶望であるが、この危機を乗り越える経過の中で人格的活力(英知)が育まれ、これまで通り過ぎてきた自分の人生に意義と価値を見出す事が出来る。そして、その訪れを受容する事が出来る。本事例が88歳と言う高齢であるが大都市の中で自立した独居生活を維持しているのは人生の中で幾多の苦難を乗り越えてきた経験から自己に対する自信と英知が育まれているためと考えられる。この段階で獲得される能力、英知は身体的・精神的機能の衰えにも関わらず、人生の統合を保持し、それをどう伝えるかを学ぶことである(Erikson, 1982/1989)。

本研究の目的は、大都市の中で病弱でありながらも積極的に独居生活を選択し独自の生き方を楽しんでいる超高齢者の1事例を通して、その独居生活の支えとなっている主要因をエリクソンの理論を参考に整理し明らかにする。そして今後、それらを老年看護の中で独居する超高齢者の支援に役立てることである。

研究 方 法

1. 対象：大都市に独居する超高齢女性1名。
2. 対象の選択・依頼方法：地域の高齢者福祉行政機関に研究協力者紹介の依頼をし、内諾が得られた協力者の紹介を受ける。その後電話にて研究協力者に直接確認をし、訪問日程を打ち合わせる。初回訪問時、書面にて研究の趣旨を説明し、承諾を得て開始した。
3. 研究期間：1999年3月～2000年3月。
4. データ収集：3回家庭訪問し、インタビューガイドを使って、面接を行った。1回の面接時間は原則的に約60分とした。面接内容は対象者の同意の上録音し、そのテープを逐語的に文字に起こした。面接でえた情報に加え、対象者の自費出版した「自分史」を参考にした。インタビューガイドは独居理由・期間、生活状況、人間関係、健康状態、ライフ・イ

ベント、信仰・信念、価値観などで構成した。

5. 分析方法：個人史を記述し、エリクソンの理論を参考にまとめ独居生活を支えている主要因を分析した。

6. 倫理的配慮：データ収集並びに結果に付いて対象者のチェックを受け内容の確認を得た。結果の公表についても承諾を得た。

結 果

1. プロフィール (表1参照)

K氏は都市部のマンションの1階に独居している。周囲の環境は繁華街から路地を入った静かな住宅地ですぐ前には小学校がある。健康状態は加齢による軽度の貧血と心不全があるが、日常生活には特に問題となっていないと感じている。2年前庭で転倒し大腿骨頸部骨折をし手術を受け治療したが、下腿に力が入らず速く歩けない。昨年より2～3回体力低下、貧血で入院し、体力回復後退院している。月2回の受診は娘が同行しており内服治療を受けている。家族は1人娘が結婚し、男女1名ずつの孫がいる。車で1時間半の所に居住している。娘家族は同居を勧めるが本人が望まず、最期まで自由な生活を維持する事を考えている。人生で最も大きな出来事は終戦後、夫の病気のため、自分が働いて一家を支えなければならなくなったこと。それがきっかけで一生の仕事となる洋服店を始め、最近まで仕事を続けられた事である。

2. 個人史の記述 (表2参照)

エリクソンのライフサイクルの八段階を幼児期から思春期・青年期、成年期(成年前期を含む)、老年期の3期にまとめる。

1) 幼児期から思春・青年期

K氏は、10人兄弟姉妹の三女で下から3番目として生まれた。医師であった父親は一人娘で女学校を卒業したばかりの母の家に婿養子としてK家に入った。6歳の時、父は52歳で幼児を含め10人の子供を残し病死した。子供時代は、家族の中にいつも乳児がいて母は家事に追われ、母の思い出よりも祖母との関わりが多く思い出される。父の死後、家族は家を処分し、他県に移り、そして大学で研究をしていた長兄を頼って再び他県に移り住む。引っ越して間もなく叔母の計らいで、子供たちを慰めるために従兄弟達と海水浴に連れていってもらった。その時に食べた氷小豆がもとですぐ上の兄は9歳で赤痢に罹り死亡した。その時、家族の中で1人クリスチャ

表1 K氏の背景

生年 年齢 体型 身長・体重	明治44年4月生 88歳 痩せ型、脊椎腰椎の屈曲見られず。Ht.140cm Wt.30~34kg
独居期間・理由	16年 夫との死別、娘家族の同居の申し出を拒む、自由に自分の好きなように過したい
家族背景・支援者	別居家族：独り娘とその夫、孫2人
住居環境	自宅、マンション1階。大都市の中の住宅地、前に小学校有り
教育背景・職業	高等女学校卒業、洋裁店・多目的教室経営
健康状況	1年前大腿骨頸部骨折手術後完治、戸外は歩行介助 心不全・貧血で年に2~3回入院、月2回の受診チェック
ADL	外出時 娘の同伴、買い物は娘・元の従業員が支援するのみ
福祉サービス利用状況	公的機関より緊急呼び出しベル、電気コンロの借出し
定期的スケジュール	週2回娘のピアノ教室に場所を貸す
趣味・娯楽	俳句・書道・手芸・料理・作曲・絵本や小説の創作
生きがい	自分の好きな事をして楽しむこと、人を楽しませ、人の役に立つ事
生活上注意している事	食事（蛋白質・野菜・減塩）、転倒防止、体調に合わせ無理をしない
自分から見た性格	自分の考えを大切にする、人に左右されない、我が侘、意志が強い
誇り	チャレンジ精神、自分を大切にする事
将来の夢・希望	人のために役立つこと、自分自身の生活を楽しむこと
宗教・信仰	無宗教、キリスト教会に通ったこともあるが魂の存在は信じない。すべての宗派を超えた天の神様に毎晩感謝の祈りをしている。強く希望する事は叶えられると信じている。聖書を読むと疑問が起る。
死について	いつ死んでもいい様に準備している。葬儀はしない。遺骨は夫の遺骨と共に海に流して欲しい旨を娘に話してある。死後献体を決めている。
人生で印象に残る出来事	病弱な夫に代わって自分で洋裁店を持った事

表2 ライフサイクルの発達段階

エリクソンのライフサイクル発達段階	K氏の特徴	K氏の老年期への影響
I 幼児期 基本的信頼対基本的不信 希望	医師の家庭に10人兄弟姉妹の8番目として生れ両親・祖母・兄姉・乳母の世話を受け育った。	子供には乳母がおり行き届いた世話を受けながら恵まれた環境で基本的信頼を獲得しその後の人生に結果的に希望を持つ事ができた。
II 児童初期 自律対恥・疑惑 意志	武家のしきたりの残る厳格な家庭環境の中で両親や祖母による教育は思慮分別を弁えるものとなる。	自分で困難に立ち向かい人生を切り開く姿勢や自律心はこの時期に獲得され意志の強さが培われた。
III 遊戯期 自発性対罪悪感 決意	9人の兄弟姉妹の中で恵まれた家庭生活を送る中で自発性が養われた。	自分が良いと思ったら人がどう思おうと自分の好きな様にする。自分の大事な一生だから何でも人のしない事に挑戦してみたいと言う欲求がある。
IV 学童期 勤勉対劣等感 才能	6歳で父の病死、続いて2~3年の内に兄と2人の弟が病死。悲しい時期を過すが祖母が父の代役となり、家族の精神的支柱となった。	暗く寂しい時代も祖母の強さと前向きな生き方がどんな困難にも勤勉に努力し、自己の才能を伸ばして行く精神的強さを身につけた。
V 思春期 アイデンティティ対混乱 忠誠	女学校を卒業し、小説家を目指し作家活動に没頭するが、それだけでは生きて行く事が出来ないと考え、洋裁を習い、創作の面白さを知る。	この時期に身に付けた好きな洋裁が戦後の時代のニーズに合い一生の仕事となる。作家活動は後に童話や自分史を書く事となり創作活動に発展する。
VI 成年前期 親密性対孤独 愛	小説を書いたり、洋裁をしている時知人の紹介で出版社に勤める男性と結婚。戦争中であつたが幸せな日々を過ごし、夫の友人を得意な料理で持て成し喜ばれることを楽しみとした。	人を喜ばせることで満足。自分の人生をも楽しく面白いものとする実感している。機会あるごとに人を引き得意の料理を振る舞い人を喜ばせる。
VII 成年期 生殖性対自己投入 世話	空襲で焼け出され、夫は怪我が元で病弱となり辞職を余儀なくされ悲劇と感じた。女兒の誕生。生計を立てるため自分で見つけた場所に洋裁店を開く。娘は自分の理想通りに育てる事ができた。自分の子供を産み育てる事ほど面白い事はない。	最も辛い時期と思われた時が最も明るい未来に開かれることとなった。一生の住処となる明るくすばらしい場所に洋裁店を開く事ができた。悪いと思ってた事が良い方に結果的に変わって行った。
VIII 老年期 統合対絶望 英知	自分の人生だから自分を大事にして思う様に面白く生きたい。自分の力でどうにもならない事は悩まない。	人生の中で悪かったこともすべて良い方に変えて下さっている自分は神様から愛されている。

ンだった長兄のお陰でその兄はとても行き届いた最期を迎えることができた。祖母から繰り返し聴かされている。末兄は死ぬ前に、当時それぞれの子供が分け与えられていた玩具を兄弟に分ける様祖母に頼んだと言う。その後、2～3年の内に2人の弟は当時風土病と言われた疫病で病死した。数年の内に家族4人を失った。その時「女の子は丈夫でいいね」と言われ、いい気持ちじゃなかったことをよく憶えている。母親は家事に追われ、子どもの教育には母方の祖母が当たる事が多かった。K氏が80歳過ぎて出版した自分史に載せられた兄弟姉妹の幼児期の写真には別々の乳母が共に写されており、家族は多くても子供の世話は医師である父親の存命中は行き届いていたと思われる。家庭教育に関しては、家族の中心は祖母であり母は余り口を出すことはなく、精神的に祖母の影響が強い。祖母は軍医であった夫に先立たれ、何でも良く知っている気の強い未亡人であった。晩年、脳梗塞で倒れ半身不随になった後も筆笥の鑑につかまり起きあがろうと賢明に練習していた。また、近くに始めて路面電車が通る噂を聞き、母に見たいので不自由な体でありながら見に連れて行って欲しいと頼み見に行っていた。その好奇心の強い祖母の性格が自分の中で育ち、自分のチャレンジ精神も祖母と似ていると感じている。また祖母は信仰篤い仏教徒であったが、お不動さんへの信仰も強かった。K氏は特定の宗教は持っていないが神への信仰心は子供の頃の家族の影響と感じている。

K氏の学童期の父や兄弟の突然の死の体験は母や祖母を中心に家族の絆を強め、信頼関係をより確かなものとしていった。また試練の時を通して兄や義姉のキリスト教信仰、家族の仏教や神道の熱心な信仰心はK氏の宗教心に強い影響を与えた。K氏の老年期に1つの宗派に捕らわれない自由な信仰心は毎日の感謝と願いの祈りとして霊的な拠り所となっている。また、家族の病気や死という苦難を乗り越え家族を世話し支え続けた祖母の気強さと誇り高き生き方はK氏の人生の支えとなっている。K氏がこれらの時期に獲得した基本的信頼感や宗教心はK氏の老年まで影響している。

2) 成年期

女学校を卒業後、兄を頼って関西より関東に移り母と3人で暮らした。嘗てより興味のあった小説を書いて懸賞募集に応募した。またYWCAに入ったが、思うように周囲になじめず挫折感を感じ辞めた。その後、洋裁を覚えて働き収入を得ていた。30歳を越えて出版社勤務の夫と見合い結婚をした。第二次世界大戦中であったが、2人だけの生活で余り不自由

を強いられることもなく幸せな日々であった。殆ど食糧難も感じず、手に入るもので夫やその友人を得意な手料理でもてなし喜んで貰うという幸せな恵まれた生活を送っていた。昭和20年大空襲で戦災にあり、焼け出され、夫は負傷し其れが基で病気がちとなり働けず、終戦後退職を余儀なくされた。その後、結婚6年目に長女が38歳で生まれた。夫の病気と家族の将来の生活設計が自分の腕に掛かっていると決断を迫られた。自分ができることを色々考えた。好きな料理で身を立てる事も考えたが、食糧不足の時代でもあり、結局資本の掛からない鉄とミシンさえあれば出来る好きな洋裁をしようと決めた。その準備として、自らの足で洋裁店の場所探しに歩いた。幼児の手を引き、探し回り疲れると惨めな気持ちになった。繁華街やその周辺を探している時、何軒目かにたどり着いたのが永住の地となる繁華街から少し離れた現在の場所である。理想に描いていた陽の当たる明るい庭のある家が売り出されているのを見つけた事ができた。この家を見た時、気持ちが一変してパーと明るくなり、将来も明るくなる様に思えた。度々この時の体験を話す。この場所が見つかったことは運命的な出会いであったと感じている。経済的に十分とは言えなかったが、夫の退職金で買うことが出来た。洋裁店の開店に当たり、夫の元の上司の計らいで新聞折り込み広告を出すことができた。広告の「本日開店」に「何でも受け賜ります」のふれ込みの添え書きの宣伝が効を奏し、多くの客を得て成功を収めた。そこには客を引くために縫った事もない紳士服もできると書いた。婦人服はモダンな身体の線を強調したデザインで戦後の若い人に受けた。特に其れまで日本にはなかった自由な時代の流行にあったデザインは都会と言う場所柄、進駐軍を相手に働く女性に人気があった。徹夜をするほどの多くの注文を受けた。その利益で2度の家の改造をし、娘のピアノも買い習わせることが出来た。建物の一部は多目的教室として、洋裁教室を開き教えたり、音楽好き仲間を招いてミニリサイタルを開いたり、生活に変化を持たせ有意義に楽しむことができた。音楽や俳句等にも関心が高く、作曲を試みたり、俳句の会に投稿したり、雑誌に独自の料理を紹介したりと常に仕事以外にも積極的に活動し楽しく充実した日々を送った。夫は退職後は自宅療養をしながら洋裁店の経理を担当したり、子供の世話をしながら、日々の家事を手伝い支援してくれた。娘は自分の理想通りに元気に育ち、音楽大学ピアノ科を卒業した。卒業と同時に母親の勤める弁護士と見合い結婚をし、2児をもうけた。娘家族は都内に車

で1時間の所に住居を構えている。娘は主婦業の傍らK氏の家でピアノ教室を開き、週2回教えに通って来ている。

K氏は終戦後に突然夫の病気、退職によりそれまでの幸せな生活が一変してしまい、その時は自分を不幸だと感じた。しかし、洋裁店を開き順調に仕事が進み、自分で切り開いた生き方が成功したと感じた事が自分に対する自信となり、誇りとなっていった。また、K氏の仕事や育児への熱意に兄姉の応援が経済的・精神的支援となって送られ、兄姉に対する信頼を一層強めている。夫や娘の協力も家族の絆を強めた。家族や兄姉、仕事関係での人間関係は深く強いが、近隣者との人間関係は数人に限られ、必要最低限の付き合いのみであった。K氏は近隣者の話題や噂話に関心がなく、親しく付き合う事も支援を求める事もなかった。

3) 老年期

マンションの間取りは夫の死後、老後の1人暮らしを考えて体が不自由になっても生活動作がし易い様に自分で設計し改造した。ダイニングキッチンとベッドルームが1室にまとめられ、それにユニットバスがついている。他の一室は仕事場と多目的教室と応接間を兼ねた広間となっており、洋裁台、グランドピアノ、応接セットが置かれ、無駄のない設計になっている。数年前までは洋裁店と洋裁教室を開いていたが、現在は殆ど休んでいる。洋裁はデザインと裁断は自分でやり、縫ったりボタン付けのような細かい作業は50年前から勤めている近所に住む女性従業員が担当している。2年前、大腿骨頸部骨折で入院し治療したが、下肢に力が入らず外出時娘の同行が必要となった。また体力が低下し易く体調を崩しやすい。数カ月おきに入退院を繰り返している。老化に伴う軽度の心不全があるが積極的治療を必要とするものではなく、日常生活に必要な体力が回復すると退院している。毎週2~3回ピアノ教室に来る娘に銀行や公的手続きなど必要に応じて頼んでいる。娘は同居を勧めるが、最期まで独りで暮らすことを強く希望し娘の申し出を断っている。娘は心配はあるが母親の希望に添いたいと考え、例え独りで死を迎えることになっても本人の意思を尊重するしかないと感じている。買い物や受診時の付き添いや代行は娘と近所に住む従業員が支援している。緊急時にはベッドとバスルームに掛けてある緊急用ボタンで従業員と近隣者の2個所に連絡が行くことになっている。その後救急車の手配と娘への連絡と言う手はずになっている。今まで2回具合が悪くなり、救急車で入院している。日頃は毎週通ってくる娘の

ために得意な煮物料理を作って食べさせることを楽しみの1つとしている。2人の孫の内、孫息子は脳性麻痺のため言語・歩行障害があるが、本人の希望通り大学院で法学を学んでいる。孫息子の幼児期には童話を読んで聞かせたり、また自ら童話を創作し読み聞かせた。孫のために書いた童話「ほこりたかき、ふーらいねこ」は自費出版し知人や親戚に進呈した。主人公の野良猫はどんなに空腹でも自分のプライドを守るためには死をもいとわないと言う少し寂しい童話であるが、K氏の崇高な精神を表している。25歳の孫息子の成長は楽しみであると同時に将来を案じ出来るだけ苦勞をさせないように考えている。将来、自分の葬式や墓について、娘夫婦の死後、仏事の多い仏教ではお寺や墓の世話に孫息子に負担を賭けることになる。そのため、葬式はしないで遺骨は夫の遺骨と共に海に流して貰い、後の世話がいらぬようにと考えている。また孫の進路の相談に乗ったり、良き話し相手となっている。20歳の孫娘は高校卒業後、カナダ留学や専門学校へ通うなど挑戦するが、進路の決まらないまま自分のしたいことを探し続けている。孫娘のその生き方を理解し、自分の考えをいつも大事にするようにと話し励まし見守っている。

昭和24年より住んでいる地域での近隣者との付き合いは数軒のみである。仕事の忙しいこともあったが、近隣者とのコミュニケーションの必要性をあまり感じていないために自分から求めて出かけることはない。近所の噂話を告げる人も居るが「陰で何か言われても構いません」と言い放している。一方、「2尺3寸の間口の住人にしては頭が高いと思われるのでしょう」と、近隣者の自分への評判を想像して笑っているが、特に問題としていない。友人は多い。遠方に住んでいるものが多いが手紙や電話や訪問など昔からの付き合いで長くお互いに良く理解し合っている。

今までの人生について後悔したことはない。常に自分の言いたい事を言って来たので特にストレスも貯まらない。自分が良いと思ったら、人が何と言おうと自分が好きなようにするより生がない。自分の大事な人生だからと考えている。また洋裁のデザインや趣味においても人のしないことをしたいと常に新しいことに挑戦している。自分を一番大事にし、楽しく生きることが若さのもとと考えている。

8年前、80歳の時「自分史を書く」教室に通い、自分の生涯のまとめとして祖母や家族のこと、今までの自分の生き方を自分史に書き、人生の集大成をしている。趣味を通しての親しい友人は多い。ある

時「自分史を書く」教室仲間の1人に「Kさん、ある日娘さんがピアノを教えるにきてみたらお母さんが冷たくなっていたって言う最期の迎え方も良いんじゃないの」と言われた。それに対して、「ううん、それだとね、変死と言うことになって警察を呼んだり面倒になるからそれは困るの」と淡々と答えたと言う。もう「生きることも死ぬことも自分にとっては同じようにさっぱりと考えています」と、話す。

自分の才能について、自分史やかつて創作した小説や童話を書く度にみんなに褒められるが、自分にはプロになれる才能はないと思っている。また、自分の人生を振り返るとき、夫の病気や辞職は悲劇であったが、その代わり自分の好きな洋裁を生涯の仕事としてやってこられたことは良かった。夫が病気になった時や自分が骨折で入院し苦しかった時、一生懸命祈ったが良くなり祈りが聞き入れられなかったと思い、祈ることを一時辞めたこともある。しかし、現在は毎晩神様に有り難うと感謝している。また祈りの中には自分のことだけでなく家族や親しい友人のことも含めて皆の幸せを祈っている。自分の考える神はキリスト教とは限らずすべての宗派を超えた愛の神であり、悪かったことも良い方に換えて下さる。神様に愛されていると感じている。最期まで自活した生き方をしたいと祈りの中で願っている。自分の意志に沿って生きた人生後半は納得のいく人生だったと感じている。人生のターニングポイントとなったライフイベントの1つ1つの意味付けが英知によって有意味なものとして感じられている。

また、K氏は大都市に独居しながら希薄になり易い近隣者との関係に依存する事なく、自分に必要な人間関係は家族や仕事・趣味仲間と相互に信頼できる関係を確立している。

考 察

ここでは超高齢者であるK氏の独居生活の支えとなっていると思われる要因について、Eriksonの発達段階を参考に分析する過程で明らかになった結果から、次の3点、誇り、信頼関係、信仰、について考察する。

1. 誇り

Eriksonによると、ライフサイクルを通して、自律と恥・疑惑の課題の再経験は特別な社会的意味を持ってきた。晩年ではこの課題の同調的及び非同調的要素の融和はその人の中に社会に総括的に参加し

関係する事への関心を容易に引き起こす。高齢者は意志的で自己依存できる人間としてどのくらい立派に生きてきたかを誇りにし、また自己決定と依存との間のバランスが老年期の能力の変化と共に移り変わる時、この誇りを維持しようとして闘う(Erikson & Erikson 1986/1999)。K氏は父親の死や兄弟の死、精神的な支えであった祖母の死を青年期までに経験している。また、夫との死別後母の生き方から自然に自分で意志決定し、自立した人間として生きてきた。夫の病気による退職後も自分で新たな人生を切り開き家庭を支え、希望通りに仕事や子供の教育をする事ができた。これらが自信と満足感を生み誇りとなった。晩年、身体的衰えが見られても他者への依存を最小限にとどめ、出来るだけ自立した生活を維持するために自己調整し、新たな生き方を切り開き、自信を持ち誇りを失わなかった。過去の人生の肯定化や統合ができ、自分の人生の意味を見出す事が出来ている。このことがK氏の誇りの基盤となっていた。

McCartney (1988)によると、独居を望んでいる老婦人は自己のアイデンティティや生活の質をどのように強化し、維持するか葛藤を感じている。多くの老婦人は問題なく上手く年を取っているにも関わらず、老いに対し身体的機能の喪失や知的機能の喪失を予想し恐れている。更に、上手く老いることや生活の質を高めることは、Eriksonの発達課題の肯定的側面(統合・生殖性・親密性など)に注目することが重要である。88歳のK氏は病弱であり自己の身体的老いを充分に感じているにもかかわらず、独居生活を自分の意志で選択し家族に依存する事なくそれを継続できる事に満足し、葛藤を感じていない。慢性の心不全があり疲れると衰弱が強くなり、体力を維持していく事がいかに重要かを知っている。万が一、生命の危険があったとしてもそれは自然な事であり、仕方がない事と娘家族にも説得し、恐れていない。今ある時間を上手く使い人生を最大限楽しみたいと考えている。McCartneyも述べているように、自律には基本的信頼が獲得されていることが重要であり、サポート源となるものの探求とその維持が大きな意味をもつと考えられる(McCartney, 1988)。娘は母親の要望を最優先し支援している。K氏は自己の自由が尊重され支援を受けられる事が安定感や満足感を促進させ自律した生活を充実させていると考えられた。

2. 信頼関係

Eriksonによると、基本的信頼と不信の間の緊張は

人生の極初期にまで溯り、その時期の健康な乳児は頼りになる支えと反応を環境が与えてくれる中で絶えず育って行く信頼を通して希望の源を発展させる (Erikson & Erikson, 1986/1999)。K 氏の信頼関係は娘家族との関係、特に娘との絶対的信頼関係は K 氏の身体的衰弱の強い時も不安なく自信を持って独自の生活を可能にしている。この強い信頼関係は乳幼児期の両親、祖母、乳母の深い愛情から獲得され、その後の人生においても大家族の中で育成されたと考えられた。約50年間住み慣れた地域の人々や近隣者との付き合いは一部分のみに限られ、関係は薄いがお互いに安定した関係が出来ていると考えられた。距離的には離れていても趣味や共通の関心事での繋がりや女学校時代の友人との関係は精神的側面での相互理解が強く、手紙や電話や訪問といった質の濃い関係が有った。K 氏の人間関係は量的な欲求よりも質的に満足できることの方が重要であり、一度結ばれた信頼関係は長期的に継続していた。これらの関係は相互に高めあい尊敬し合い、自己の生きる希望の源を発展させている英知の現われと考えられた。K 氏にとっては大都市における近隣者との付き合いや信頼関係が希薄であっても家族や旧友や趣味仲間との信頼関係強いいため全く問題となっていない。

3. 信仰

Erikson によると、宗教との関わりは自分自身の人生を通じ、世代にまたがる連続性の源となってきた。まさにこの連続性こそが次第に信念の対象となってきたのであるが、それはすなわち頼りになると感じるものであり、信じていれば安心だと感じるものである (Erikson & Erikson, 1986/1999)。K 氏の育った環境は神仏混交であった。両親や祖母は仏教やその他の信仰にも熱心であった。兄や義姉はクリスチャンであった。現在は娘と孫息子はクリスチャンに成っている。一時は自分も聖書の勉強をしたが、疑問が残り受洗するには至らなかった。そして自分の葬式はどんな様式でも無用と決めている。しかし、すべての宗派を越えた天の神様に祈る事により安堵感を得ている。また自分の強い望みや祈りは叶えられると信じている。この超自然的存在者への信仰心は乳幼児期の環境の中で生れ育ってきたと考えられた。すべての宗派を越えた超自然的存在者との関係は愛で結ばれていると感じ、先祖や家族との継続的繋がりを確信している。世代を超えた継続的繋がりの感覚は祖母や母の主体的な生き方やチャレンジ精神を思い起こさせ、孤独感や不安感を乗り越えさせ

ている。この信仰心は K 氏の自由で積極的な独居生活の支えとなっていると考えられた。

結 論

一事例を通して、病弱でありながら大都市に独居する超高齢者の生きる支えとなっている要因として以下のものが明らかとなった。

1. 誇り：人生を振り返り、様々な出来事や体験を統合し過去の不幸な出来事も肯定的に見る事が出来、自分の考えを最も大事にし人生を楽しむ事を中心に生きていることを誇りに感じていた。
2. 信頼関係：少数でも深い相互理解や強い信頼関係で結ばれた絆は生きて行く上で安心感や安定感が得られ、自信を持って障害を乗り越えて行く事ができると考えられた。大都市の近隣者との関係の希薄さも家族や仕事・趣味仲間との信頼関係が確立されていれば問題にはならなかった。
3. 信仰：超自然的存在者への強い信仰心が幼児期より家族の中で育てられていた。これは宗派や世代を超えた継続的な繋がりの感覚を持たせ、人生の困難や孤独感や将来への不安感を乗り越えさせ独居生活の支えとなっていた。

文 献

- Camacho, T. C., Strawbridge, W. J., Cohen, R. D., Kaplan, G. A. (1993). Functional ability in the oldest old, *Journal of aging and health*, 5 (4), 439-454.
- Erikson, E. H. (1959) / 小此木啓吾 (1982). 自我同一性, アイデンティティとライフ・サイクル. 東京, 誠信書房.
- Erikson, E. H. (1982) / 村瀬孝雄, 近藤邦夫 (1989). ライフ・サイクル, その完結. 東京, みすず書房.
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (1986) / 朝長正徳, 朝長梨枝子 (1999). 老年期, 生き生きしたかわりあい. 東京, みすず書房.
- 厚生省監修 (2000). 平成12年版厚生白書. pp.27, 東京, ぎょうせい.
- McCarthy, J. R. (1988). Elderly woman who want to live alone: lessons learned, *Journal of geriatric psychiatry and neurology*, 1, 171-174.
- Porter, E. J. (1994). Older widows' experience of living alone at home, *IMAGE; Journal of nursing scholarship*, 26 (1), 19-24.

The Elderly Living Alone:

An Urban Case Study

Yasuko TANI*

Abstract:

This study examined the case of an elderly woman living alone in an urban area. The study examined the kinds of support she needed. Data was collected by visiting the home and interviewing the subject who agreed to tape recording of the interview. The subject was eighty-eight years old and had chronic heart trouble but chose not to live with her daughter's family. She had chosen an independent life and felt satisfied with it. She liked to live alone and she enjoyed her life. She had some help only when she needed it. The results of the study showed three factors of support for an elderly woman living alone. One was pride, which she sustained by integrating the negative experiences of her life into the positive experiences. The second was relationships of mutual trust. The relationships with her daughter and grandchildren were strong and based on trust. The third was faith. She had a strong spiritual life and prayed to the Lord every night. She had even planned her own funeral arrangements. She had found meaning in her life.

Keywords:

elderly woman, living alone, support.

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing